

## 小学生の身体と生活時間の関係に表れる性差について その 消費的生活時間に着目してー

村上智恵・小林浩平・原祐一（東京学芸大学）

キーワード：消費的生活時間 身体 性差

### 1、目的

子どもの身体に焦点を当てると、この20年間、子どもの体力・運動能力の低下（文部科学省平成17年度体力・運動能力調査）や、子どもの骨折が過去10年で1.5倍程度増加（日本体育学校保健センター報告）が、子どもの身体の問題としてあげられる。このような問題は、外遊びや運動遊びの減少、テレビの視聴やテレビゲームなどの非活動的な遊び時間の増加といった、子どもの日常生活における活動量が指摘されている。

松田（2006）は、タイの子どもと日本の子どもを比較する中で、日本の子どもが、外遊びやスポーツ活動をする子としない子に二極化されていることを調査結果から明らかにし、その要因として、「勉強」でも「遊び」でも「お手伝い」でもない「テレビを見る」「休養・くつろぎ」といった消費的時間である「第三の時間」の存在を指摘している。このことから、子どもの身体における問題は、生活全般から捉える必要があり、松田の指摘する「第三の時間」と子どもの身体との関係性は重要な視点となる。一方で、このような生活時間を問題にした際に、男子と女子に生活時間の使い方に性差があることが指摘されている（中山、大竹、伊藤2005）ことから、子どもの身体と生活時間の関係から性差がどのように関連しているのかを明らかにする必要がある。

そこで本研究では、小学生の身体（体力テスト・動き調べ）と、生活時間との関連から表れる性差を明らかにする。特に、本報告においては、生活時間の中でも子どもの消費的生活時間の使い方がどのように影響を及ぼしているのかに焦点を当てて報告する。

### 2、研究方法

#### 1) 対象者

T小学校全学年の児童406名 期間：2006年10月下旬  
11月上旬

#### 2) 調査内容

・生活時間調査：1日24時間を子どもがどのように過ごしたかを調査用紙に記す。15分単位で該当項目に直線を書き入れる様式であり、学校生活のある一日を対象

とした。調査用紙は、総務省の行っている「社会生活基本調査」の調査票を基に、項目数の選別や子ども用の項目を加えるなどの検討をして

作成したものである。

・動き調べ：83項目の動きを表した絵に、最近一週間の間で行った動きに丸をつける。83項目の絵は、8つの運動群に分類されている。

・体力テスト：50m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ

### 3、結果と考察

体力テストの結果から、立ち幅跳び、ソフトボール投げにおいて、中・高学年で男子の方が女子より上回っていた。また、動き調べの83項目を8つの動作郡（姿勢変化・平衡動作、上下運動、水平動作、回避動作、荷重動作、脱荷重動作、補足動作、攻撃動作）に分けて、男女差を見たところ、脱荷重動作と上下運動を除く全ての動作郡で全学年、男子の方が女子に比べて上回っていた。特に、「攻撃動作」は全学年において、顕著に男子が女子に比べて上回っている。逆に、「脱荷重動作」では4,5,6年生においては、男子に比べて女子が上回っていた。この結果から男女に見られる動きの差を読みとることができる。

これらの子どもの身体における調査結果をもとに、消費的生活時間と性差の関係性については当日詳しく報告する。

### 4、参考文献

・松田恵示（2006）「第3の時間」と子どもの運動遊び・スポーツ-日本とタイの生活時間調査の比較から（小特集スポーツと開発教育.53.pp158-167）

・「タイ・カンボジア・日本の行動者平均生活時間のジェンダー比較」（中山、大竹、伊藤2005）

・文部科学省「平成17年度体力・運動能力調査」

・日本体育・学校健康センター発行「学校の管理下の災害 - 基本統計 - 」